北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

2024へき地教育推進国際講演会『台湾から見た日本のへき地・小規模校教育の特徴と可能性』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-04-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/0002000590

HUE RISE

2024 北海道教育大学へき地教育推進国際講演会

台湾から見た 日本のへき地・小規模校 教育の特徴と可能性

台湾では現在、新たな創造的な教育活動となり得るへき地・小規模校教育の振興に力を入れています。そのため台湾の教育界では、日本のへき地教育研究に学ぶと共に、それをさらに発展させて台湾の未来型の創造的な教育活動に繋げようとしています。

このような台湾から見ると、日本のへき地教育研究にもさらに発展的な課題と可能性が見えてきます。本へき地教育推進国際講演会では、日本に留学経験もあり、台湾のへき地教育や創造的な教育活動で活躍されている林雍智先生をお迎えし、台湾から見た日本のへき地・小規模教育の特徴と可能性を捉えたいと思います。

開催日時

令和６年３月８日（金）15:00～17:00

会場 北海道教育大学 札幌駅前サテライト
（札幌市中央区北5条西5丁目7 sapporo55 4階）

参加方式 対面及びオンライン型（Zoom）のハイブリッド
※使用言語は日本語です。

申込方法・申込期限

北海道へき地・小規模校教育研究センターHP
より、３月４日（月）までにお申込み願います。
（https://www.hokkyodai.ac.jp/edu_center_remoteplace/）

講師 台湾亜洲大学　林雍智（りんようち）准教授

教育行政・学校経営が御専門で、マルチグレード教育（異学年教育）・実験教育（オルタナティブ教育）や校長養成等を専門にされています。台湾教育省の委託委員も多くされており、また上席校長養成課程を考案し、全台湾18県の上席校長の養成プログラムの講師を務めて全国の上席校長養成を完成しました。

編著書には、『実験教育』、『実験教育面面観』、『師傅校長培育』、『教育分野論文作成のフォーマット：APAフォーマット７の応用』、『未来教育創新』など18冊を超えています。

お問い合わせ
北海道教育大学教育研究支援部連携推進課（担当　小林）
TEL：011-778-0942　Fax：011-778-8376
E-mail：crc@j.hokkyodai.ac.jp

主催：北海道教育大学へき地・小規模校教育研究センター
共催：全国へき地教育研究連盟、北海道へき地・複式教育研究連盟
後援：文部科学省、北海道教育委員会、札幌市教育委員会

へき地教育推進国際講演会
台湾から見た日本のへき地・小規模校教育の特徴と可能性

講師：亜州大学幼児教育学部准教授　林　　雍智 氏

令和６年３月８日（金）、全国へき地教育連盟、北海道へき地・複式教育研究連盟との共催、文部科学省、北海道教育委員会、札幌市教育委員会に後援をいただき、「へき地教育推進国際講演会」を開催しました。

講演会は、「台湾から見た日本のへき地・小規模校教育の特徴と可能性」をテーマに、講師には亜州大学幼児教育学部准教授の林雍智氏をお迎えしました。本学札幌駅前サテライトを会場とした対面参加と、オンライン参加によるハイブリッド形式で開催し、海外含めて全国各地から約70名の参加がありました。

▲開会挨拶　玉井　康之（センター長）

▲ご講演者　林　雍智　氏
（亜州大学幼児教育学部　准教授）

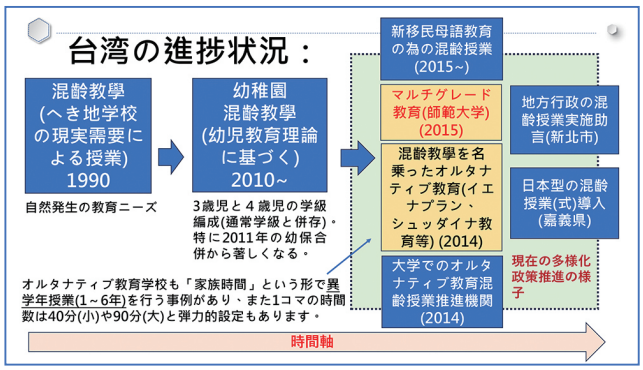
※以下には、当日のご講演について本学へき地・複式教育研究センター発行の『へきけんニュース141号』所収より、一部編集して概略を掲載いたします。

≪講演の主な内容≫

講演会は、前半が「台湾におけるマルチグレード教育」、後半が「台湾から見た日本のへき地・小規模校教育の特徴」でしたので、以下、２部に分けて概略を紹介します。なお、ここで掲示した図の出典はすべて林先生作成のスライド資料から転載の許可を得ています。

（1）台湾におけるマルチグレード教育

マルチグレード教育（multi-grade instruction）は、2013年に国連が定義したところによると「教師が同一授業時間帯において、同一教育の場で異学年の生徒に対する授業」を計画・実践することだと言われています。また、混齢授業（mixed age teaching）は「生徒の年齢に関係なく、ひとつの教育の場に集まって展開する授業」と言われていますが、林先生は台湾ではこの二つの概念はほぼ同義的に使用され、多様化する指導法の現状をスライド１「台湾の進捗状況」で解説



スライド１「台湾の進捗状況」

しました。

前述した台湾教育省の委託事業は「マルチグレード教育チーム」によって運営され、北部は台北市立大学、西部は台湾師範大学、東部・南部は国立屏東大学の先生方がそれぞれ管轄し、主な業務として、学校現場へのマルチグレード教育の導入、モデル開発、地方行政への研修支援、研修動画作成、書籍出版、法令案の作成、国際研究会の開催などが実施されています。

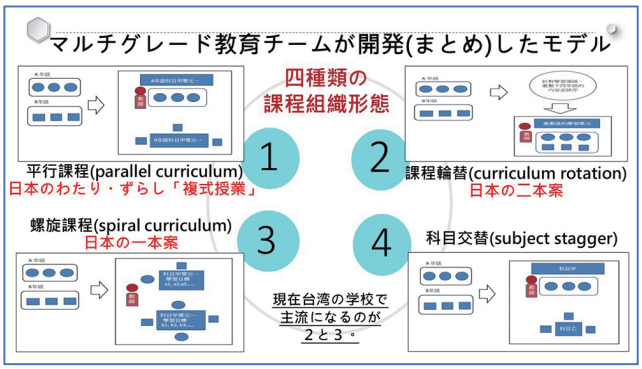
現在、同チームは台湾で実践されるマルチグレード教育を次の４つの「課程組織形態」に類型化しており、このうち台湾では②と③が主流だとしています。

①平行課程（同教科・学年別の複式指導）

②課程輪替（同教科・同単元化で２年間指導する異学年混成の単式指導）

③螺旋課程（同教科・同単元化で程度別指導をする異学年混成の複式指導）

④科目交替（異教科・学年別の複式指導）



スライド２「四種類の課程組織形態」

つまり、台湾のマルチグレード教育は、学年別の同教科カリキュラムを再編成することによって、異学年混成グループに対して単式あるいは複式で学ぶ環境を作り出しており、さらに学年にこだわらず、年齢や理解度など児童・生徒一人ひとりの質・程度に着目した柔軟なグループ分けが特徴と言えます。日本の場合は、学習指導要領における学年別指導に重点を置くことから①や④が主流となります。この類型による対比からは各国の教育文化や指導観も類推され、たいへん興味深い内容となっています。

（２）台湾から見た日本のへき地・小規模校教育の特徴

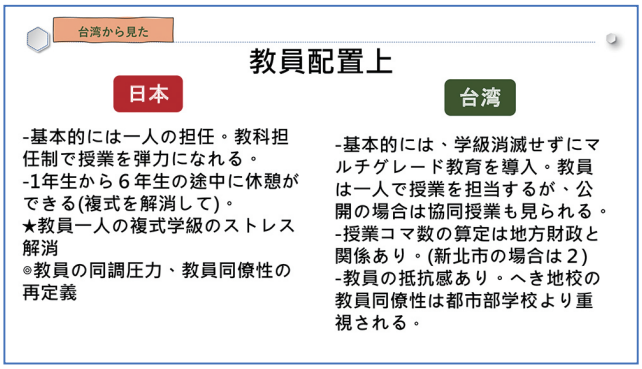
後半は、次の６点、すなわち①法律・政策、②研究開発、③教員配置、④環境・施設設備、⑤学習指導要領の定着、⑥未来を見据えたへき地・小規模校教育の可能性、について「台湾から見た」日本の特徴が紹介されました。

まず①法律・政策については、義務標準法（公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律）の学級編制基準によって、複式学級になる場合の児童生徒数が定められている点、変則複式学級（２・３年や４・５年）が可能な点、学校統廃合が進む中でも統廃合できない学校を容認している点、複式でも学級担任は一人である点、そして令和の日本型学校教育によりICT導入などへき地・小規模校の授業形態が変化している点が挙げられました。

②研究開発については、へき地・複式・小規模学校教育に何十年にも渡る実績や実践事例がある点、教員養成大学に当センターが位置づけられている点、各教科の適切な指導法や複式指導に関する研究もある点を特徴とする一方、へき地教育研究はへき地に在職する研究者が中心になっている点が台日共通であるとしています。

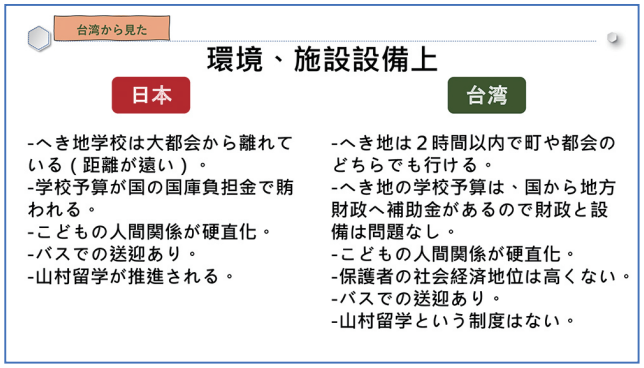
次に③～⑥の点については、林先生が日本と台湾を対比したスライドを作成しているので、それを転載しつつ主要な点を示します。

スライド３「教員配置」では、日本のへき地・小規模校の教員は、特に小学校では基本的に担任一人で複式授業を実施することを確認しつつ、また近年の教科担任制や教員に負担をかけ過ぎず、協働性を高める動きに対する期待を彷彿させます。



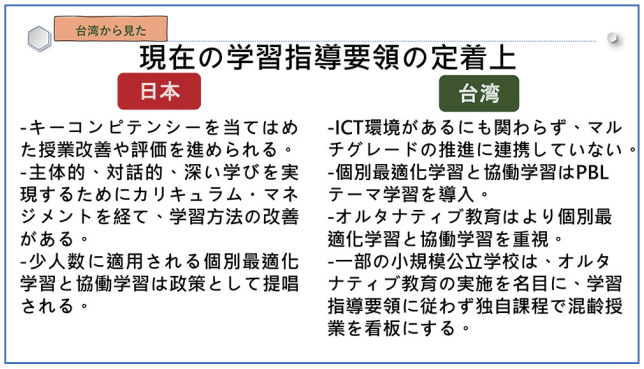
スライド３「教員配置」

スライド４「環境・施設設備上」では、台日共通な点として「子どもの人間関係が硬直化」する懸念が指摘されていますが、この点はオンライン接続も含めた近隣学校との集合学習や遠隔学校との交流学習の実践例や、山村留学制度の紹介も含めた研究交流にも期待をされています。



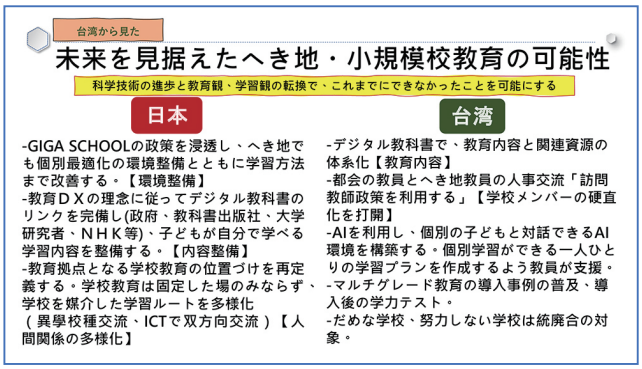
スライド４「環境・施設整備について」

スライド５「現在の学習指導要領の定着上」では、「主体的・対話的で深い学び」や「個別最適な学び、協働的な学び」といった命題を中心とした学習・指導方法の改善の動きやカリキュラム・マネジメントの重要性が述べられています。また、台湾におけるオルタナティブ教育の特徴も指摘されています。



スライド５「現在の学習指導要領の定着について」

スライド６「未来を見据えたへき地・小規模校教育の可能性」では、GIGAスクール構想とICT環境の整備活用によって学習環境や内容展開が改善し、教育拠点としての学校教育自体も再定義される時代だとの指摘もあります。一方、台湾界でも都市部とへき地の教員交流やAI技術応用など台湾側の可能性は我々にとっても興味深い内容と言えます。



スライド６「未来を見据えたへき地・小規模校教育の可能性」

（３）まとめ

最後に林先生は「台湾の急務」と題して、次の５点を挙げられました。

①教員養成大学にへき地研究機関を設置。

②教職課程に「へき地小規模学校教育」や「小規模校実習」（２週間）の新設。

③マルチグレード教育経験者（現場教師）による全国的な研修会の開催。

④へき地小規模の管理職への学校経営支援。

⑤研究に基づく各教科の授業実践モデルの提示。

これらの課題は、林先生のこれまでの実践と研究活動を基礎として、さらに日本のへき地・小規模校に関する教育研究に関して学びを深め、さらに台湾独自の知見に基づく挑戦に溢れています。是非これらの課題が達成できるよう、当センターとしても日本におけるへき地・小規模校教育研究に関する資料などは惜しみなく提供していきたいと考えています。